

歸るんですよ。

無精較

▲ある處に二人の無精者が居つた。一人の無精者が云ふには

「どうだ、今から二人で、無精較をしよーじやないか」

すると今一人は、

「僕はするのも面倒臭い」

▲これも一人の無精者、ある時旅をして田舎を歩いて居つた。所が丁度晝ごろになつて來て腹が空いて耐らなくなつた、勿論腰には辨當を下げて居るのであるが懐手をしてる手を出して、これを取るのが、面倒なので、「まゝよ、仕方がないは、誰かに出遭ふに違がないから、そしたら其人に取つて貰ふまでのこつた」

など、思つて腹の空いたのも我慢して歩いて居つた。

すると向うから、饅頭籠をかぶつて、顔を少し仰向にして大きな口を張つて懐手としながら來るものがあったので、「や、彼はきつと腹が空つてるのに違ない夫で口をあんなに開けてるのだ、一つ彼に相談をして見よー」と云ふので、側近くなつてから、

「もし、口を御開けなすつてる所から見ますと、貴所はお腹が空いてるのでせう。私も同じく空いてますので、實、腰に辨當も下げてるんですが、夫を取り出すのが、少々面倒うなので申しかねますが、握飯を一つ御別まうしますから、一つ取つて頂けますまいか」

すると其男は口を開たまゝで「なーに私だつて籠の紐が解けかゝつてるのをこうして口開て顔で止めて居ますのよ」